

女のしんぶん

は私・女の目・友

2021年
7月10日

第1254号(1963年2月15日第三種郵便物認可)

発行所：女性会議

〒113-0033 東京都文京区本郷2-27-2 東真ビル5階
TEL 03(3816)1862/FAX 03(3816)1824

E-mail:onnano-shinbun@josei.jp
http://www.joseikaigi.com/

毎月10日・25日発行

月額330円(送料別)年間5,448円(送料込)

郵便振替口座 00170-0-99031



「これから話すのは、私、一個人の意見でありまして、当事者総意というわけではない前提でお聞きください。」

そう切り出した林竜平さん(21)は、5月31日、甲状腺がん罹患当事者(17歳の時に手術)として、NPO法人3・11甲状腺がん子ども基金主催のオンライン記者会見に立った(カッコ内は筆者補足)。

*

(福島の小児甲状腺がんを)*「過剰診断」と言われることについては「手術したことが間違っていたのかもしれない」という心理的負担を感じてしまいます。お医者さんに「受けたほうがいい」と言われて、受ける、受けないの最終的な判断は我々本人です。それを「過剰診断」や「がんを」取らなくてよかったと言われると「お医者さんが嘘をついたのかな」「まちがった判断をしてしまったのかな」というストレスを感じたり、要らない後悔をしたりしてしまう。「過剰診断だ」という報道ではなく、当事者に寄り添った発信を工夫していただければと思います。

検査について、一部では規模の縮小、学校集団検査の必要性が少しずつ議論にあがってきていますが、なくなることは反対です。よく「10年の節目を迎えて」と言われますが、ただか10年で何がわかるんだと。我々が経験した3・11東日本大震災・原発事故というのはそんなに薄っぺらいものだったのか、という印象を、どうしても当事者は受けてしまいます。

甲状腺がんを経験した当事者の声

甲状腺検査を縮小しないで！

10年の節目という言葉が「使わないで」というわけではないのですが、当事者の声を発信する場を、メディアの皆さんや福島県も、多く設けてくれればと思います。

*

5月の「県民健康調査検討委員会」では、甲状腺検査の「同意書」の学校回収をやめ、すでに4月から福島医大に直接同意書を送る方法に切り替えていると発表された。検査を受けるためには、保護者の一時間(郵送)が必要になる。

林さんは、その学校検査の縮小・廃止へ向かう流れや、理由とされている過剰診断に危機感を持っている。早期発見・早期治療が危ぶまれるからだ。林さんは、甲状腺検査には救われたと話す。結果は命に別状はなかったが、担当医からは「声帯に近いから将来声が出せなくなるかもしれない」と言われた。もし検査で早期発見されなければ、「この場で声を出して発信できなかったかもしれない。手遅れで、全摘とか、声帯にかかって声が出せない、最悪の場合は転移して、抗がん剤投与、大規模な手術と考えると、恐ろしい。恐怖しかない」とも答え、また、学校検査縮小の流れについては、「率直に『さびけるな』という気持ち」と語った。「人権の専門家の方々も含めた幅広い多様性をもった議論をしてほしい」と、林さんは言う。



オンラインで記者会見に臨んだ林竜平さん

一方、学校検査縮小・廃止の検討材料として、甲状腺検査対象者および関係者への聞き取りが非公式で行なわれ、その結果が福島県のホームページ上で公開されている。

聞き取り前半では、参加した生徒も保護者も、林さんとほぼ同じ意見(学校検査はあったほうがいい・早期発見して手術をしたい等)を述べていたが、後半、検査のデメリット(過剰診断)を示されると、「(検査が)不安です」「(検査する人が)減るんだったら致し方ない」と、意見が変化している様子が見える。

6月21日の「甲状腺評価部会」では、過剰診断説を提唱する祖父江友孝・大阪大学教授が「保護者はわかっていない」と、断定。「正しい知識(過剰診断の可能性)」を持って受けていない」とし、「B判定(二次検査・経過観察)の人やサイトロジー(細胞診)をやった人、甲状腺がん罹患しても手術しない人からも話を聞くべき」と言った。それならば、林さんのように手術をした当事者からも、話を聞くべきではないだろうか。

甲状腺がん罹患当事者が、顔も名前も出し、会見を行なったのは林さんが初めてだ。

「顔を隠し、仮名で答えても、信ぴょう性に欠けるだろう、という思いがあった。一人でも多くの方の気持ちを代えたり、認識を改めていただいたりするためにも、顔を晒して(会見を)やらせていただいている」と林さんは話す。

勇気ある発信に、ただただ頭が下がります。その真摯な言葉に、福島県や、「廃止」を唱える検討委員会の委員は、耳を傾けるべきだろう。(吉田千亜)

福島県子ども基金では、甲状腺がん罹患当事者やそのご家族の支援のために「手は相対し、心は寄り添う」を理念として、情報発信、寄付も募っている。ホームページは▼



* 生きている間には症状が出ないがんまで検診で見つけること。しかし、実際にはがんの進行予測はできない。